



北方3丁目の子之神社は崖の上にある



の方は日蓮から妙蓮の法号を授けられ、宝剣館で法華経の修行に努めたので、宝剣が法華経の教えを顕（あきらか）にする法頭に代わり、北の方にちなんで「北方」の文字が当てられたというのです。

しかし、「ボッケ」の地域を見ると、地形が東の台地と西の低地から成り立っており、その境が切り立った崖になっていきます。実は、この崖状の地形を「ボケ」「ホケ」などといいます。「ボッケ」は、この地形を表した「ボケ」が訛ってできた地名だったのでではないでしょうか。

また、北方三丁目に子（ね）之神社があります。祭神は大国主命ですが、「子」は十二支の最初で、動物の鼠（ねずみ）が当てられています。そして、ネズミは大国主命にお仕えした動物です。さらに、「子」は方位で北を示します。この農業の開発神である大国主命に仕えた北の守り神の子（鼠）が、「子之神社」として祭られているわけで、ボッケに「北方」の文字が当てられたのと、何か関係があるように思われます。

昭和四十四年九月、住居表示の実施で、北方町は「キタカタ」と改称されて、北方一〜三丁目、本北方一〜三丁目に分かれ、未実施の地域だけが北方町（ボッケマチ）四丁目として昔の名称をとどめています。

次回は「二俣」を予定しています。

（社会教育指導員綿貫喜郎）

ボケ(崖状の地形)の訛り？

北方（北方・本北方・北方町4丁目）

北方は、現在「キタカタ」と読まされていますが、本来は「ボッケ」と読んできました。それは、今から五百年ほど前の応永年間に書かれた文書の中に、「ボッケ」とルビされたものがあることでも分かります。

この「ボッケ」の由来や読み方については、昔からいろいろと伝えられてきました。それには、中山に法華経寺のある関係から、法華（ほっけ）が訛（なま）って「ボッケ」になったとか、また、この地に公家の館があり、そこに主人が大切にしている立派な剣が置かれていたので、村人たちがその館を「宝剣（ほうけん）館」と呼び、それが「ボウケ」になり、やがて「ボッケ」に変わったのだというのです。

それでは、なぜ「ボッケ」に「北方」の文字が当てられたのでしょうか。これに

ついては、次のような話が残されています。

鎌倉時代の建長年間（一

二四九〜五六）、中山に館を構えていた太田乗明の北方（奥方）が、この宝剣館に住みました。太田氏は日蓮上人に仕えて、法華経の布教に努めた一族です。北